IN ROCK

1994 FEB.

2

VOL.122

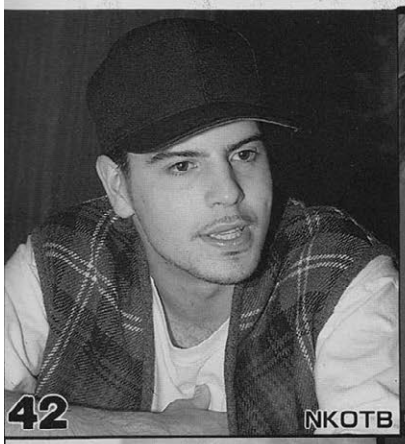
MR. BIG
MADONNA
NKOTB
BON JOVI
SKID ROW
JEREMY JORDAN
HELLOWEEN
COLOR ME BADD
BAD BOYS INC.
MICHAEL JACKSON
PET SHOP BOYS
INXS
BLIND MELON
DANGER DANGER
EAST 17

TAKE THAT
GUNS N' ROSES

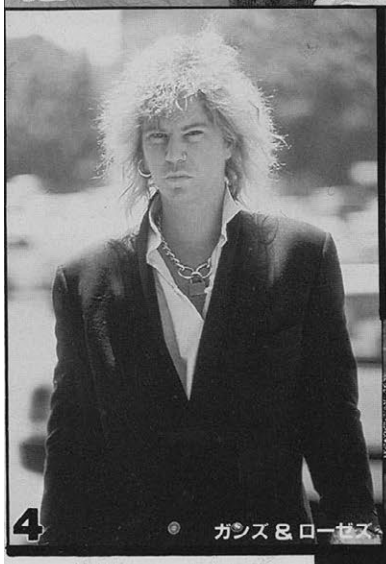
特別付録
豪華スター、カラー・ポスト・カード

CONTENTS

Cover Star★ Axl [GN'Roses] Photo by Gene Kirkland


42 NKOTB

48 ボン・ジョヴィ


4 ガンズ＆ローゼズ

8 テイク・ザット

92 ジェレミー・ジョーダン

FEATURES

1 マドンナ
4 ガンズ&ローゼズ
8 テイク・ザット
12 スキッド・ロウ
16 ジョージ・マイケル、デヴィッド・ボウイ、ミック・ハックネル
KDラング
20 ミスター・ビッグ
24 カラー・ミー・バッド
41 ブラインド・メロン
44 NKOTB
48 ボン・ジョヴィ
52 ソウル・アサイラム、パール・ジャム
53 ハロウィン
56 エアロスミス
73 マイケル・ジャクソン、ジャネット・ジャクソン
76 ブライアン・アダムス、スティング、ロッド・スチュワート、デュラン・デュラン
77 マライア・キャリー
80 イースト17
81 バッド・ボーイズ・インク
84 テレンス・トレント・ダービー、レニー・クラヴィッツ
85 ボーイズⅡメン、マニック・ストリート・プリーチャーズ
88 スウェード、ジーザス・ジョーンズ
89 インエクセス
92 ジェレミー・ジョーダン

INTERVIEWS

2 ガンズ&ローゼズ
問題発言から最新ニュースまで、巻頭大特集
10 テイク・ザット
14 スキッド・ロウ
18 ペット・ショップ・ボーイズ
22 ミスター・ビッグ……Dave Ling
25 カラー・ミー・バッド……Yuko Kato
37 マドンナ
38 ブラインド・メロン……Yuko Kato
人生、目標はひとつじゃない！シャノン、インタビュー
42 NKOTB……Yuko Kato
"たぶんこれが最後…！" ジョーダン、インタビュー
50 ボン・ジョヴィ……Joe Jackson／S.I.N.
ジョンの発言に、全英のゲイが猛反発！
54 ハロウィン……Yuko Kato
"俺は馬鹿な奴の為に音楽をやってるわけじゃない！"
マイケル・キスク、インタビュー
57 エアロスミス
61 コンセプション……Yuko Kato
72 マイケル・ジャクソン
79 ダニー・ミノーグ……Yuko Kato
82 バッド・ボーイズ・インク
87 リック・プライス……Kinuko Ohuchi
90 インエクセス……Marc Liddell
94 ジェレミー・ジョーダン……Miho Kato

PLUS

27 93年度イン・ロック人気投票発表
29 ロンドン――ジャパン、コンサート・ガイド
30 ニューズ・オブ・ザ・イン・ロック・ワールド
34 愛読者サービス
58 第2回ザ・ギタリスト
60 ヘヴィ・メタル・ニュース
デンジャー・デンジャー 他
62 アドミッション・フリー
66 バック・ナンバー紹介
71 ジス・イズ・ロンドン
74 ディスクス
86 ロック目安箱Q&A
95 編集部E日記

20 ミスター・ビッグ

81 バッド・ボーイズ・インク

特別付録 豪華スター、カラー・ポスト・カード

BLIND MELON EXCLUSIVE TALK FROM CANADA

INTERVIEW BY YUKO KATO

PHOTO BY WILLIAM HAMES

BLIND MELON

12月17日収録

カナダをツアー中だというブラインド・メロンにとっては、まだ前日の夕方6時半頃だ。日本の担当さんは、もしかかってこなかった時のためにと、心配して、連絡先の電話番号もくださったが、その心配は、(珍しく)不要だった。ほぼ時間ぴったりに、シャノン・フーンから電話がかかってきたのだ。インタビューが始まる前に読んでた、英国のメタル専門誌のインタビュー記事では、シャノンはもの静かで、口に出す言葉の持つ意味を考えてから、慎重に話す…と書いてあったが、私のインタビューに関する限り、そんな感じはない。むしろ軽快で、早口に話し続け、こちらが口をはさむ隙がない。どちらが本来のシャノン・フーンなのかはわからないが、かなりの知性派であることだけは、共通している。あのアクセル・ローズが入れ込んだのも、わかる気がする。

シャノン・フーン：こちらは夕方6時半だが、日本は何時だい？

――17日の朝、9時半です。今、ブラインド・メロンは、カナダをツアー中なんですね？どんなツアーなんですか？

シャノン：この前までレニー・クラヴィッツのサポートとしてツアーをして、今はカナダを廻ってるよ。これはブラインド・メロンのコンサートなんだ。

――どれぐらいのプレイ・セットで、どういう曲を演奏しているんですか？

シャノン：大体…1時間から、1時間半くらいかな。演ってる曲は、アルバムからの曲が中心で、他にも、アルバムに入ってない曲も何曲かやっているよ。ほら、好きだけどアルバムに入れられなかったとか、ライヴではやってみたい、そういう曲があるものだろ？

――今年に入って、まずニール・ヤングと組んで、次にレニー・クラヴィッツと組んで、ツアーをやってきたわけですが、どんな感じでした？

シャノン：ニール・ヤングとのツアーは、それこそ学ぶことが多かったね。尊敬しているアーティストでもあったから。音楽的にだけじゃなく、姿勢とかもね。例えば、ニールのツアーのローディーの中には、もう15年もニールのツアーをやってる人もいるんだ。で、みんな、家族みたいな感じでね。

――レニー・クラヴィッツはどうでした？

シャノン：いいツアーだったよ。それに、いいミュージシャンに恵まれているね。レニー自身もすごい人間で、一緒に居るだけで楽しくなる、そんな人だよ。リハーサルを見てるのもおもしろいね。突然ジャムが始まっちゃったりしてさ。

――とにかく、このレニーとブラインド・メロンのツアーは見たかったですね。'93年後半では、一番ホットなツアーと言っても良かったでしょ？

シャノン：俺達、まずアメリカを一緒に廻って、それからヨーロッパへ行ったんだけど、ヨーロッパで彼が、あんなビッグな存在だったなんて、行ってみるまで知らなかったぜ。特にフランスでなんか、想像もつかないくらいだぜ。

流行やイメージに流されて、俺達のアルバムを買わないでくれ！

――あなた達のアルバム「ブラインド・メロン」は、1年以上前に発売されたのに、バンドの真価が評価されたのは、今年の夏、「ノー・レイン」がヒットしてからですね。どうして1年もの時間が必要だったんだと思いますか？

シャノン：アルバムを出す前から、このバンドの周囲には、ハイプ(欺瞞)が溢れていたんだ。レコード会社は、そのハイプが存在している内にレコードを出したかったんだ。だけど俺達は、そういうものを利用して、自分達のレコードを売りたくなかったんだ。だからアルバムを出す前にツアーしようとしたんだ。大衆はトレンドに左右されるものさ。その波に乗っているものなら売れる…だけど俺達は、そんなやつらに、レコードを買って欲しくなかったんだ。だから、ハイプがなくなるまで発売をズラした。その結果、アルバムは爆発的に売れるというまでにはいかず、火がつくまで、しばらく時間がかかったんだ。

あなたのいうハイプとは、具体的に何を指しているんですか？

シャノン：つまり、我々の音がどういうものかも知らず、まず買おうとする連中のことさ。マスコミなんて、俺と俺が話したいと思ってる奴らの中間に居るくせに、俺が本当には何を考えてるのかを、伝えられずにいるじゃないか！決して、本人である俺以上に、うまく伝えられるわけないんだ。

――だから、直にあなたを理解する為に、ライブを観て欲しかった…というわけね？

シャノン：そういうわけだ。そりゃあ時間がかかるさ。そして、シングルで火がついたけど、それがヒットするかどうかなんて、俺達は考えもしてなかったぜ。

3枚目のシングル「ノー・レイン」が大ヒットしたわけですが、新しいバンドがブレイクするきっかけって、大抵バラードなんですね。で、大衆はそれでバンドのイメージを固めてしまって、よくバンドはジレンマに落ちいるわけですが…。

シャノン：「ノー・レイン」が気に入って、アルバムを

人生、目標はひとつじゃない！

買った連中は、大事なものを聴き落としているかもしれないぜ。ブラインド・メロンには、「ノー・レイン」1曲以上の価値はあるんだから。あの曲は、アルバム13曲の中の1曲で、バンドの小さな一部分にしか過ぎないんだぜ。どうせなら、俺達のやってること全部をわかってから、判断を下してもらいたいものだね。大衆はテレビを見たり、ロック・マガジンを読んだりするんだけど、そんなものから得るものなんて、たかがしれてるんだよ。

――このアルバムを作る前、あなた達は、LAを離れ、ノース・カロライナのスリーピー・ハウスという家で、共同生活を送っていたそうですが、今はどうなってるんですか？

シャノン：あそこでは友情を育て、頭をクリアーにできたんだ。その前2年間LAに居て、それを切り離してアルバムを作る為にこもったのさ。

シャノン：俺は何であっても、やる時にはそれに全神経を集中してるぜ。ミュージックを好きだし、今迄の人生でミュージックほど大事だと思ったものはなかったんだ。自分の欲求不満を音楽以上に解消してくれるものはなかったし、俺は一生ミュージックをやっていくだろうな。そうであっても、できるだけ全部の面をうまくやっていかなきゃいけないと思うね。俺はね、椅子に腰をおろして、今の成功が永遠に続くなんて思ったりはしないんだ。そして永遠に続くなんて考え方を基盤にして生活しているわけじゃないんだ。この意味わかるかい？他の連中はそういうことをわかってないね。人生の内で1つどうしても成功したいことがあると、もうそれ以外何も考えられないんだから。で、後で、人生は他にもあったのに…と後悔するわけさ。本当にどうしてもやりたいことがあったら、それを必死になってやればいいさ。俺だ

今、バンドは全米中に散って、バラバラに暮らしている。

――今でもある程度一緒に住んだりしますか？

シャノン：いや、俺は今シカゴに住んでるんだよ。

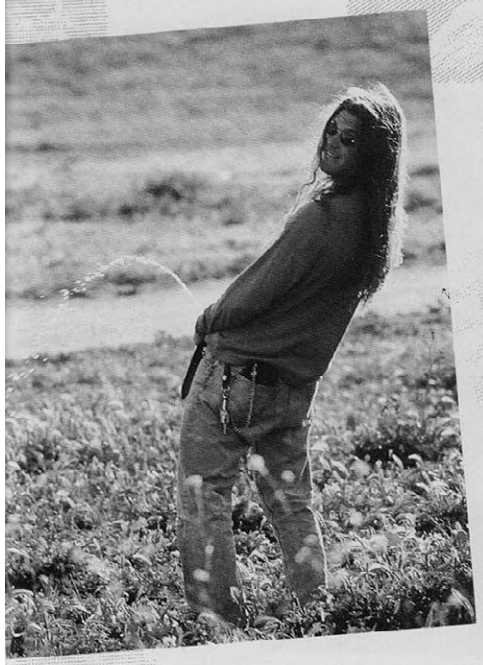
――他のメンバーは？

シャノン：クリストファーはシアトルに住んでるし、他の連中はニュー・オリンズさ。

――じゃ、全く違った土地に住んでるわけですか？

シャノン：ウン、とんでもない時期でね、どんどん成長しているというのに、落ちついてそれを回収する余裕もないんだから。だからメンバーそれぞれ時間を作って、このとんでもない状況から逃げ出すことが必要だったんだ。つまり…ロックン・ロール・バンドの一員として以外の生活もあるものだろ？俺達、今やってることも、色んな人間に会えることも、音楽を作ることも楽しんでるよ。けど、お陰で今迄放っておきっ放しだったこともあるんだ。例えば、俺の両親は年をとってくのに、俺ときたらろくに話すこともできなかったんだから。だからこの時間を生かして、もっと両親の近くに住もうと思ってね。バンドとして何かやる2～3ヵ月前から会えばバンドの方は何とかなるから。いつも今まであたり前だと思っていた家族の存在とかが、他人に囲まれて生活しているとかけがえのないものに感じられるんだ。そしてそれを家族にわからせてあげたくてね。それに、前はうまくいかなくて腹をたててたことだって、トラブルの原因は自分自身にあったってこともわかったし、ただ待ってたっていい結果を得られないということもわかったよ。今なら少しは時間があるし、そういうことを何とかできると思うから、シカゴへ越してきたんだ。

――ブラインド・メロンのメンバーとしてのロックン・ロール・ライフはあなたの生活の一部でしかない、というわけですね。



ってそうすることを選択したんだから。だけど、自分自身を必要なこと幾つかに分割したんだ。で、家族ともうまくつきあって、その上ミュージックも一杯やっていく…で、一枚の大きな絵を完成させるように自分を満足させるんだ。自分にひとつの目標だけを設けると、人生の他の部分を捨てることになって後で後悔することになると思うぜ。

――ロック・グループとしては、かなり変わった形でバンドを運営しているわけですね？

シャノン：自立するってことさ。離れる時期って、自然にわかるものだろ？俺は、とても自立した人間なんだ。自分のルーツである家族は大事にしたいし、一度ある状況をぶち破ったら、もう元には戻れないんだ。他のメンバーには、どうして今俺がシカゴに居なきゃいけないのか、ひとり離れていなきゃいけないのかを説明したし、わかってもらえたと思うよ。うちの両親は、俺には俺の人生があるってことをよくわかってくれてて、俺は、両親が落胆するからとか、悲しむからという理由で、やりたいことをやめたことはないよ。俺がやることは全部俺の生活だしな。

――バンドの他のメンバー達はどう？彼らはあなたの考え方に共感してくれてる？

シャノン：いや、そうは思わないね。このバンドじゃ、もっと建設的に考えることにしてる。つまり、誰もがそれぞれの視点を持ってるってことさ。だから俺は、彼らの代理として意見を述べたことはないよ。これからもないだろうな。反対の意見をしてるからって、ファック！とか叫んで歩き去るのは、とても簡単なやり方さ。だけどそうはしない。例え正反対の考え方であっても、理解しようとする姿勢、そいつが大事なんだと思うね。だから、意見が違うからって口論になったりはしないんだ。誰もが他の人の考え方を尊重しているんだよ。

――どこのバンドでも、そういう姿勢が欠けてるから、脱退・新加入が繰り返されるんですね？

シャノン：…俺が一番よくわかっているのは、俺自身にとって一番いいのは何かってことさ。どうすれば自分が前に進めるか？とかね。だから、他の連中のことは連中が考えりゃいいんだ…それが俺の考え方さ。

――「ノー・レイン」が大ヒットしてしまったお陰で、このツアーは大幅に延長されてしまったわけですが、いつまで続くんですか？

シャノン：このカナダ・ツアーがあと2週間だろ、で、日本へ行くんだ。日本の後は南アメリカへ行って、幾つかのバンドと2～3回コンサートをやるさ。

――それって、恒例のハリウッド・フェスティバル？ホイットニーやエアロスミスが出るんでしょ？

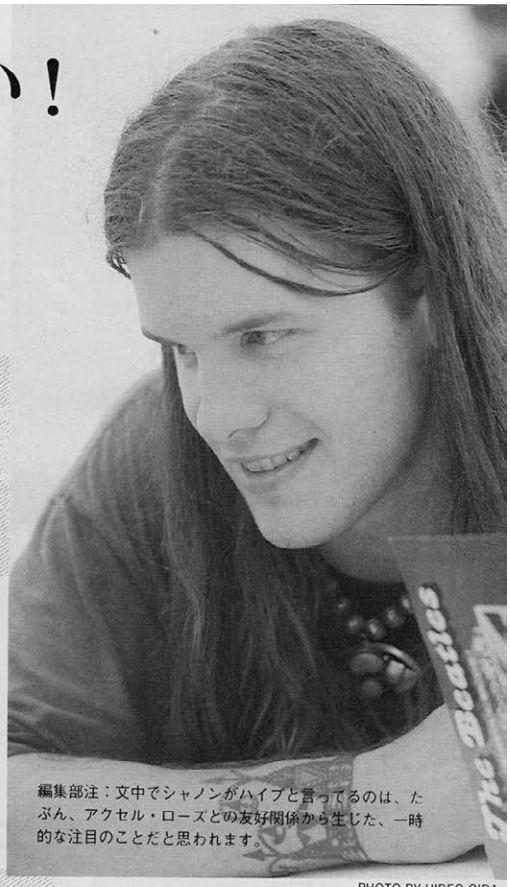
シャノン：(笑)それは知らないな。俺はバンドが幾つか出るって聞いてるだけだから…。行く価値があると思ったから行くだけで。

――で、おしまい？

シャノン：いや、全米を今度は6週間かけて廻るぜ。

――その後、スタジオへ入るんですね？もうどういう作品にしたいか？なんて、考えてますか？

シャノン：考えなんてないさ。例え今考えがあっても、スタジオへ入れば変わるだろうしさ。それにさ…ハハ、今俺があんたに話してることは、全部今の俺が考えてることなんだ。ということは、いつ変わっちまってもおかしくないってことなんだぜ(笑)。



編集部注：文中でシャノンがハイブと言ってるのは、たぶん、アクセル・ローズとの友好関係から生じた、一時的な注目のことだと思われます。

PHOTO BY HIDEO OIDA

――ファースト・レコードが成功したお陰で、アーティストとしての自由が大幅に認められて、やり易くなるとは思いませんか？

シャノン：ファースト・レコードが成功したことで、トラブルは避けられるだろうね。俺達を支持してくれた人達、火をつけてくれた人達には、深い感謝の気持ちを持ってるよ。誰しも、ミュージックは自分たちだけのために作るんじゃなくて、他の人に喜んでもらいたいから作るものなんだから。だけど、もし「ノー・レイン」を気に入ってくれて、他の曲は聴かないというなら、むしろ俺達のアルバムなんか買ってくれない方がいいよ。「ノー・レイン」しか聴かないということは、ブラインド・メロンの大部分を無視するってことなんだぜ。

――そうとは言えないんじゃない？私のアシスタントの一人はNKOTBが大好きだったけど、今はブラインド・メロンに夢中ですよ。とっかかりって必要だし、どういう形であれバンドに興味を持ってくれるという機会は大事ですよ。彼女も、ブラインド・メロンのお陰でより幅広い音楽を聴くようになったわけですし…。

シャノン：…（沈黙）、（笑いを噛み殺したように）俺はね、他人を勝手に決めつけるのは好きじゃないけど、その子、NKOTBを聴いてたなら、次は「白雪姫と七人の小びと」（ディズニー）の方がいいんじゃないの？

――成長を認めてあげてもいいんじゃないの？

シャノン：成長したいならベルベット・アンダーグラウンドやルー・リードを聴けよって言っておいて！（笑）

――日本のオーディエンスは、アメリカよりももっとミックスしてるかもしれないですよ。

シャノン：地理的にどこにあろうと、人種の違い、肌の色の違い…そんなものは関係ないさ。ミュージックをやるのは一つの同じ理由のせいなんだから。この2年、俺とは全く違った信念を持ち、全く違った生活様式をしている人間とよく会う機会があるが、お陰で、他人には他人の信念や考え方があるってことをよく理解できるようになったぜ。自分と違ってても尊重するってことさ。音楽を楽しむ理由は同じなんだしね。

――日本でのライヴ、楽しみにしてます。

シャノン：All right. Merry Christmas！

BLIND MELON

members: Glen Graham (Dr.), Shannon Hoon (Vo.), Brad Smith (Bass.), Rogers Stevens (G.), Chistopher Thorn (G.)

biography 1989年初期、ロジャースとブラッドは、ミシシッピ州のウエストポイントから、LAへ出てきた。そして、インディアナ州のラファイエットから出てきたばかりのシャノンと、翌年3月に出会い、意気投合したのである。

"17歳になった頃、俺は、自分がやってることは、自分が望んでやっているんじゃなくて、親の希望だからやってるんだってことに、気づいたんだ。"シャノンは、当時をそう述懐する。短い髪をして、工場の工員になるはずだった17歳の少年は、自我に目ざめ、両親のあたふたを無視して、自分の進む道を模索し、LAへ行くことを考えた。

18歳のシャノンは、ひとり車に乗り、フリーウェイをひたすらLAを目指した。LAまで丸4日余りかかったが、それは選択の時間でもあった。もし家へ戻りたいなら、いつでも引き返せたからだ。"それに、ひとりで車を運転している時間、俺は本当に真剣に考えたんだ。自分が何をやりたがっているか…?ということをね。"行き着いた先、LAは巨大な街で、人が溢れ、18歳のカントリーボーイは、ひたすら呆然としていた。しかも彼には、住む所もなければ、やることもなかったのだ。だから、ロジャーズやブラッドと知り合えたことは、彼の運かもしれない。

3人は、ペンシルバニア出身のクリストファー・ソーンを加え、残りのポジション、ドラマーを見つけるために、オーディションを繰り返したが、うまくいかなかった。で、ロジャースとブラッドは、故郷に居る名ドラマー、グレン・グラハムを思い出し、電話で誘ったのだった。"縁は不思議だ。"と、グラハムは言う。ロジャースが電話をしてきた日、その数時間前、グラハムが何年もやってきたバンドが、解散を決めていたのだった。そして、グレンはたった10ドルを持って3日後にはLAに到着し、ここにブラインド・メロンが誕生した。

"ロジャースやブラッドとは、LAに着いて1ヵ月以内に出会って、すぐ意気投合したんだ。グラハムやクリストファーも含め、全員小さな町で育ったから、視点が同じなんだよ。"

LAに着いてカルチャーショックを受け、なじめないものを感じていたシャノンは、同じように感じていた仲間と出会い、共感を感じたのだった。

"LAに住んでる連中は、虚像にしがみついていて、何でも否定してしまう。自分達の故郷でさえ否定してしまうんだぜ。ロジャース達に出会った時、俺は連中の誠実さにジーンときてさ。そういう正直さってやつが、俺達を一緒にしたんだ。"

バンドが結成されて1週間後、ブラインド・メロンは持っていた4曲でデモ・テープを作ることにした。そして驚いたことに、そのデモ・テープがレコード会社各社の興味を引き、すぐレコード契約ができたのである。

それから、レコーディングをしつつ、小さなクラブを廻るツアーをし、1991年秋、人気のサウンドガーデンとツアーに出るというチャンスを迎えた。

"レコードが出る前に、たくさんの人がブラインド・メロンの曲となじみができて、いい土台が出来たと思うんだ。"

しかし、LAで曲を書き続けるということは、シャノンにとって苦痛になりつつあった。特に、アクセル・ローズの好意で、「ドント・クライ」をアクセルとデュエットしてからは、周囲が騒しくなった。アクセルはシャノンをステージの上に招き、"いずれビッグになる奴だから、顔を憶えておけよ。"とまで言ってくれた。お陰であらゆる人間はアクセルのことを訊きたがり、一時期、シャノンはアクセルのことを訊かれるたび、露骨にイヤな顔をするようになっていた。

"今はもうそういう気持ちは超えたけど、世間が、「ドント・クライ」を、ブラインド・メロンのキャリアの一部分だと思い込んでいるのは、困ったことだと思うね。あれはバンドとは関係なく、俺という人間が、友情の範囲内でやったことにすぎないんだから。ガンズはいいバンドだし、一緒にやれて、俺は嬉しかったぜ。"

"アクセルと俺は、同じ町の出身でね、アクセルを通じて、この業界のことをわかったのも、幸運だったさ。"

LAで、シャノンは有名人になっていたのに、それがかえって、彼にLAを離れる決心をさせていた。

"我々は小さな町で育ったんだ。LAでは、焦点が分散してしまって、100%ミュージックに集中できない。それに、LAに満ちてる欺瞞には、とてもついてゆけないものがあるね。LAは、人間として成長させてはくれたけど、俺達は、故郷も悪かない、そう考えるようになったんだ。"

ブラインド・メロンは、バンドをあげて、ノース・カロライナのダーハムに移住し、「スリーピーハウス」と名付けた家で、共同生活を送ることになった。そして、プロデューサーをリック・パラシャー(パール・ジャム、テンプル・オブ・ザ・ドッグ)に決めてからは、彼のスタジオのあるシアトルに移り、そこでアルバムを、ほとんどライヴ状態で録音してしまった。

'92年春、ブラインド・メロンは、MTV主催の120分ツアーに出演し、アルバム発売を前に、「ディア・オル・ダッド」をプレミヤすることができた。そしてそれを、ローリング・ストーン誌は、「新鮮な天才、驚くべきデビュー」と呼んだものである。

'92年9月に、全米でアルバムを発売してからは、オジー・オズボーン、アリス・イン・チェインズ、ジョン・メレンキャンプらとツアーをし、'93年に入ってからは、ニール・ヤング、レニー・クラヴィッツと、ツアーをガンガンこなしている。

バンドの知名度は、ツアーを続けるたびに上がっていったが、彼らの人気を決定づけたのは、'93年夏の「ノー・レイン」の大ヒットだった。グレンの妹、ジョージアに、蜂の格好をさせたビデオも評判になったのだ。

"成功したら、もっと自分がかき回されちゃうかと思っていたが、そうでもなかったね。今のような成功を手に入れたくて仕方がない、17歳の少年に戻ってしまうこともあるし、自分のやりたいことが何なのかを考えながら、静かに窓の外を眺めている奴でいることもある。そして時には、17歳の時に憧れていた成功の方が、現実よりもすばらしいものだとわかりながら、ただシリアスになっていることもあるんだよ。ただ、俺達はバンドである以前に、友人なんだ。それが俺達の強さだと思うね。まるで幼なじみの女の子と結婚したみたいだ。生の自分を知ってくれてるから、自分が浮わつかないでいられるんだ。"

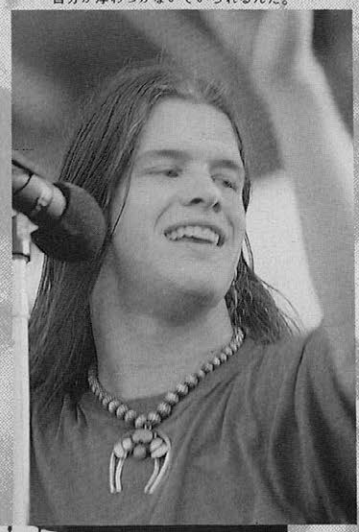
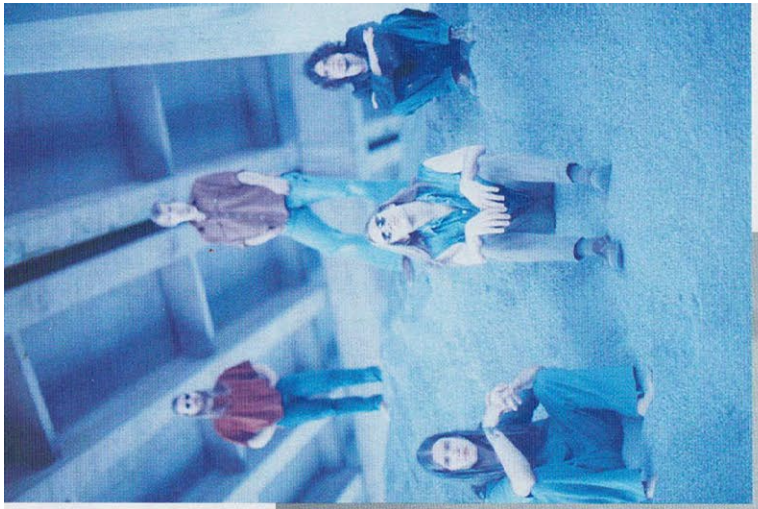


PHOTO BY HIDEO OIDA

BLIND MELON